

戦後80年

「あの時」を語る



インタビューに答える数学者の藤原正彦さん＝7月14日、東京都武蔵野市

子3人を生かした母の迫力

1945年8月9日、ソビエト軍が日ソ不可侵条約を破り、満州になだれ込んできました。当時は新京(満州国の首都、現中国吉林省長春)におり、父作家の新田次郎氏)は満州国中央観象台で課長をしていました。私は2歳になったばかりでした。

つてきました。母は、どんなことがあっても子どもを生かすという迫力で極限状況を乗り越えてきたのです。

父は終戦の2カ月後にソ連軍

の捕虜となりました。多くが飢えと寒さと重労働で亡くなった中、技術者として優遇された父は1年余りの抑留で生きて帰れました。それは負い目となり、辛い思い出なのです。

父は、下の2人の子ども(私と妹)が生きて帰るのは無理だと思っていたようです。母も、ソ連の収容所に行った父は死んでしまったと思っていたのです。

5歳(兄)、2歳、0歳(妹)の子を抱える母(作家の藤原てい氏)は泣きながら「一緒に(日本に)帰って」と懇願しましたが、父は観象台に戻ってしまいました。(母と子3人は)それから1年以上かかって日本に帰

つてきました。母は、どんなことがあっても子どもを生かすという迫力で極限状況を乗り越えてきたのです。

父は終戦の2カ月後にソ連軍の捕虜となりました。多くが飢えと寒さと重労働で亡くなった中、技術者として優遇された父は1年余りの抑留で生きて帰れました。それは負い目となり、辛い思い出なのです。

父は、下の2人の子ども(私と妹)が生きて帰るのは無理だと思っていたようです。母も、ソ連の収容所に行った父は死んでしまったと思っていたのです。

1 数学者・藤原正彦さん

3人を誰が日本に連れてきた「お父さんは私たちを見捨てたんじゃないか」とたんかを切るんです。父はかなわないと思って、2階の書齋に上がってしまったのです。私から見て父は立派でした。父が結婚した後、母は私の妻に「今度戦争が起きたら、正彦の腕を切り落としますからね」と言ったそうです。頭があれば、数学はできる、腕を一本切り落としたら戦争に行かなくて済むというのが理由です。

母は2016年に亡くなり、子どもにとって一番良い教育は、親の話、先祖の話を聞かせることです。そうすることで初めて家族愛、郷土愛、祖国愛が生まれます。

藤原 正彦氏(ふじわら・まさひこ)

1943年7月、満州新京生まれ。東京大学大学院修士課程修了。専門は数論。「若き数学者の米田」で日本エッセイストクラブ賞受賞。主な著書に「国家の品格」遙かなるケンブリッジ」など。

亡くなった人も毎日話に出てくれば、生きているのと同じです。生かし続ける方法というのは、みんなで話しかけることなんです。だから戦争も伝えることで風化させない。それが子どもへの一番の贈り物になると思います。

新京駅で家族と別れた際、父は一度戻ってきて、腰の手ぬぐいを外して私の顔に巻いたといいます。父が最後のお別れと思つてくれたんだなと思えます。ウクライナでロシア侵攻から逃げる際、お父さんが戦いのために戻ろうとすると、子どもが「行かないで」と泣き叫ぶ場面があります。あれを見ると父のことを思い出します。(聞き手＝時事通信政治部・真島裕)

戦後80年を迎え、戦争の記憶をどう継承し、平和をいかに問い直すかが改めて問われている。今も各分野で活躍する、数学者でエッセイストの藤原正彦さん(82)、作家の五木寛之さん(92)、歌手の加藤登紀子さん(81)、落語家の林家木久扇さん(87)がそれぞれ「あの時」を振り返り、平和への願い、次世代へのメッセージを語った。